

『 健 や か な 環 境 へ 一 歩 を 』

地球環境問題の主演は市民である。  
草の根レベルからの取り組みがなければ、地球温暖化防止条約京都会議（C O P 3）で決まった二酸化炭素などの削減目標はまず達成不可能だ。もっと基本的には、地球環境問題は生活に起因するところが大きく、私たち一人一人が被害者であると同時に加害者でもあるという構造を持っているからである。

しかし、現実はどうか。当研究所が実施した「市民のエネルギー意識調査」の結果によると、全体の8割の人が「ふだんからエネルギーの現状や将来について関心がある」とする一方で、「自分の生活では、無駄なエネルギーを使っていると思う」と答えた人も6割に上った。私たちの

行動はまだまだ頭に追いついていないようだ。

そうした中で、新しい動きも芽生えている。例えば、乗るならハイブリッド・カーなど低公害車の方が格好いい、と思う消費者が増えてきている。こうした芽生えを大切に育て、「意識から行動」への流れをもっと大きなものにするためにはどうすればよいかを考えてみたい。

まず私たちの足元を見てみよう。日常生活の中で、私たちが今すぐにでもやれることがある。先の調査では市民が実行している省エネ行動についても尋ねているので、その結果をいくつか引用してみよう。テレビについては、「見ない時はこまめに消す」人は全体の4分の3に上るが、「長い時間見ないときは主電源を消す」人は全体の半数になる。マ

イカーでは、「近所への買い物は、車を使わず徒歩や自転車で行く」人は7割だが、「なるべくマイカーを使わず公共交通機関を利用する」人は3割に減る。風呂では、「残り湯を洗濯に利用する」「入浴は家族が続けて入る」人は全体の半数である。読者の方々はどの行動レベルであろうか。「暮らしの工夫」といったアイデア冊子を提供している企業もあるので参考になる。

次に、私たちの視線を足元から少し広げて、「家」全体に向けてみよう。地球環境問題を考えるとき、身の回りの行動を変えるだけでなく、私たちの生活基盤である住空間そのものを変えるという視点も重要である。当社ではNEXT21という、豊かな自然と最先端の技術の両方を取り入れた未来型の集合住宅の実験に取

り組んでいる。実験を開始して4年、エネルギー使用量は従来方式に比べ約30%が削減され、生ゴミや生活排水の全量が住棟内で処理・再利用されている。また、約20種の野鳥が羽根を休めにやってくるほどの緑も育っている。それはちょっとした街なかの‘森’であり、‘オアシス’である。

今度は、私たちの目を家の外にも向けてみよう。活動の場をもっと広げて、地域としてやれることがあるのではないだろうか。身近な例として、豊中市では行政の声かけで、市内に住み、学び、働く市民や企業の150団体が集まって「とよなか市民環境会議」を結成している。価値観や利害関係を異にするさまざまな人々が、2年掛かりで知恵を出し議論を重ねて、地域として実行可能な

行動計画「豊中アジェンダ21」づくりに取り組んでいる。

また、西宮市では、次代を担う子供たちが環境に優しい「地球市民」に育つように、学校・行政・企業・ボランティアが地域ぐるみで協力している。6年前に西宮市が始めた子供たちのための環境学習プログラム「地球ウォッチングクラブ」は、環境庁が後押しをして今や活動の輪が全国に広がっている。もしかすると、私たち大人がお題目を唱えている間に、意識の面でも行動の面でも子供たちの方がずっと先を歩むことになるかもしれない。

このように、地球環境問題の克服のためには、私たち一人一人が身の回りの行動や生活のあり方を見直し、一步を踏み出すことがなにより大切である。具体的には、自ら実行する

「私の環境アジェンダ」を持つこと、さらには、活動の場を広げ他の人と協力して「私たちの環境アジェンダ」づくりをしていくことだ。例えば、「職場のアジェンダ」、「商店街のアジェンダ」であり、「地域のアジェンダ」、「世代を超えたアジェンダ」である。

「健やかな環境」を求めて、自分を棚上げせずに自ら考え実行する。そして、互いに知恵を出し合い学び合う中から、自然と人が共生し、人と人が共生する「健やかな精神」溢れる新しい社会も見えてくるのではないだろうか。

以上